

谷本富と樋口勘次郎の教育方法思想

——明治30年代の国家主義と個人主義——

稲 葉 宏 雄

A Study of Educational Method in Tomeri Tanimoto and Kanjiro Higuchi

——Nationalism and Individualism in the Meiji 30's——

INABA HIROO

(一)

明治30年代の思想潮流の特徴は国家主義と個人主義の相克にあった。日清戦争の勝利によってナショナリズムは高揚し、それをイデオロギー的に代弁したのが高山樗牛の「日本主義」であった。しかし樗牛自身その死（明治35年）の直前にはニーチェ、日蓮に傾倒して、著しく個人主義的な思想傾向を示すようになった。この個人主義をある意味で徹底したのが日露戦争後の自然主義であった。この国家主義と個人主義の相克は教育思想にも反映され、教育の目的、内容、方法、児童観に影響することになった。時代の国家主義と個人主義の葛藤を、教育思想として鮮かに反映したのは谷本富と樋口勘次郎であった。

この論考は、明治30年代の国家主義と個人主義の思想対立の構造を明らかにしつつ、谷本と樋口の教育方法思想の検討を通じて、明治後半期の教育方法に対する個人主義と国家主義からのインパクトを究明しようとするものである。この時期の谷本と樋口の個人主義的教育方法思想は、大正自由教育の思想的源流をなすものであり、大正教育の考察は、その源流としての明治後半期の教育の思想的実践的検討を要求しているといえることができる。

(二)

福沢諭吉は1885（明治18）年「脱亜論」を書いた。彼は、日本が自らの旧套、アジアの固陋を脱して西洋文明に移る「脱亜」の立場から、日清戦争を義戦とした。日本の近代化は「脱亜」の結果であり、その進歩の証拠は日清戦争の勝利によって最も明白に示されたというのである。

福沢によって表現されたナショナルな心情が、日清戦争後の時代思想の一つの流れを構成することになる。それは明治30年代の思想的潮流が、先ず国家主義から始まったということである。それを典型として示したのが高山樗牛であった。彼の国家主義の宣言であった「日本主義」は1897（明治30）年に出ている。思想家としての質は別にしても、その死に至るまでの樗牛の思想の変転は、明治30年代の時代思潮の軌跡を鮮かに示している。彼は「日本主義」で展開した国家主義から、「美的生活を論ず」（1901年）における個人的本能の充足を説くローマン主義に転身して、ニーチェを讃美するようになり、死の直前には日蓮に傾倒したのである。樗牛が示した国家主義

から個人主義への思想の転移は、明治30年代の思想の流れの表現でもあった。

樗牛の影響力について、当時、松山中学に在学した安倍能成（1883年—明治16年生）は、次のように書いている。「仙台の二高教授をやめて、博文館にはいった高山樗牛の文章は、その頃、私の一番愛読したものであり、当時樗牛は『文芸時評』は固より、教育時評も社会時評もやって居り、私は其等をみんな読んで、樗牛が日本主義になれば私も日本主義になり、樗牛が美的生活論を唱えれば、それに感動したというわけである。」¹⁾ 後年、国家意識と個人意識の相克において明治30年代の思想潮流を把握した安倍は——『明治思想界の潮流』（時代と文化：昭和16年・岩波書店）——「私が人生哲学の方向へ赴いたのには、何といたっても樗牛の影響が大きかったことを否定できない」²⁾ といって、美的生活論に示された樗牛の思想的転向が彼の個人主義的傾向を決定したことを回顧している。

樗牛の国家主義の背後には、日清戦争の勝利と戦後処理の問題があった。戦利賠償としてかちえた遼東半島を、日本は、ロシア、フランス、ドイツの三国干渉によって清国に返還せざるをえなかった。このことは否応なしに、日本国民に、国際関係における日本、白色人種に対する黄色人種としての日本人についての反省を強いることになったと樗牛はいう。この疑問に答える必然性をもって出現したのが彼の日本主義であった。その日本主義は、「世界今日の事局に処し、日本国家の独立進歩と日本国民の安寧幸福とを保全せむが為に、最も適切なる国民道徳の実行主義を立て、是れによりて闔国の人心を統一するにあり」³⁾ というように、国民的特性に基づく道徳原理の確立を意図するものであった。

この国民道徳の原理としての日本主義は、国法の大綱を示す帝国憲法、教育の針路を明示する教育勅語とともに、日本人の民族性に基づいて国民精神の統一を目的とするものであった。彼によれば、政治、教育は国民思想の一部分であった。従って「国民的意識を根柢より統一し、是の憲法と勅語とに適應するの国民精神を陶冶するは即ち是れ日本主義の本分に非ずや。国家の發達は民心の統一を須要とす。統一は主義を予想し、主義は国体と民族とに待つ。国民精神の統一に対する日本主義の責任實に茲に存す」⁴⁾ という主張が帰結したのである。

(三)

樗牛の国家主義に相拮抗する形で、30年代の思想潮流を形成したもう一つの流れは、社会主義思想とそれを背景とした労働運動であった。石川三四郎編・幸徳秋水補・『日本社会主義史』は、「日清戦争は特に日本社会主義運動本舞台の序幕を開かんとするの準備なりき」としている。日清戦争を契機とした資本主義の急速な發達は必然的に労働者階級を出現させ、彼らの階級的自覚と人間的解放に指針を与え、その実現を図る社会主義思想と労働運動が展開されることになった。

明治30年代初めから「鉄工組合」「日本鉄道矯正会」「活版工組合」等の労働組織が結成され、その組織はストライキによって数々の労働争議を戦った。そうした労働組合の組織と労働運動を思想的理論的に指導したのが、社会主義運動であった。30年代における社会主義運動は、1898（明治31）年の「社会主義研究会」の結成から開始された。その中には、片山潜のような労働運動の實際家、幸徳秋水のような自由民権運動から出た人、安部磯雄のようなキリスト教徒、『萬朝報』記者出身の堺利彦等、様々な人が含まれていた。それは社会主義者の組織としての「社会主義協

会」に発展し、1901年には日本最初の社主義政党「社会民主党」が結成されたが、それは政府によって直ちに解散させられた。社会民主党は結成と同時に「社会民主党宣言」を公表し、28条にわたる社会主義綱領を示した。その中で、社会主義政党の立場からの教育への姿勢が、「人民をして平等に教育を受けしむる為に、国家は全く教育の費用を負担すべきこと」「高等小学校を終るまでを義務教育年限とし、月謝を全廃し、公費を以て教科書を供給すること」という条項で明確に示された。

その後、日露戦争に直面して、幸徳秋水、片山潜、堺利彦、内村鑑三、木下尚江等は平民社を結成し、平民主義、社会主義、平和主義に立つ『週刊平民新聞』を発刊して、絶対非戦論の立場から反戦運動を展開した。『平民新聞』は政府の度重なる弾圧のため1905年1月廃刊され、同年11月に平民社も解散した。しかしその社会主義運動は、科学的社会主義者によって『直言』『光』『日刊平民新聞』に受けつがれ、キリスト教社会主義者によって『新紀元』に受けつがれた。

こうした反戦と社会主義運動の中から、教育の軍国主義化、教育の階級性等の本質を鋭くついた「小学教師に告ぐ」(石川三四郎・1904年11月・『週刊平民新聞』)、「軍隊主義教育とは何ぞ」「帝国大学を破滅せよ」(木下尚江・1907年・『飢渴』)等の優れた教育論説が生み出された。それらはいずれも、国家主義、軍国主義の教育が人間の本質の全面的開花を目指す教育とは根本的に相入れないものであることを批判したのである。こうした社会主義的立場からの教育批判は、体制側の教育理論と実践、教育行政に、社会主義からの浸透をいかにして防衛するかという危機意識を深刻な形で惹起したのである。

(四)

明治30年代の思想潮流は国家主義と社会主義から始まったが、高山樗牛の思想軌跡が示すように、その中期には強烈な個人主義、ロマン主義が出現することになる。日露戦争に向うナショナリズムとそれに背を向けるような個人主義が、30年代の思想の流れをあげたのである。1902(明治35)年、19歳で一高に入学した安倍能成は、樗牛の思想転向が当時の青年層に与えた衝撃について次のように回顧している。「日本主義の首唱者たりし高山樗牛が33、4年頃、その国家主義から明瞭なる個人主義に転向するに及んで、天下の青年も亦靡然として個人主義的傾向に赴くに至った。筆者の如きも彼の日本主義に動かされるよりは遥かに多く彼の個人主義に動かされた。日清戦役の前に北村透谷を襲ったような悩みが、日露戦争前の日本青年の中にも来た。」⁵⁾

この個人主義を樗牛は「美的生活を論ず」(1901年)で展開した。彼にとって、人性本然の要求としての本能の満足が幸福であり、美的生活であった。道徳と知識はそれ自体において独立の価値をもつのではなく、本能を指導して美的生活を助長する限りにおいて意味をもつものと考えられた。

本能が目的であって、知徳は手段であり、知徳のみでは人生の幸福を達成することはできないという主張には、既成の道徳や理想に反抗するというロマンティズムと道徳的理想や知的真理という枠組から人間を見るのではなく、むしろありのままの人間の存在を凝視しようとする自然主義に通ずる立場がみられた。樗牛の見地は、ある意味で、30年代の全体的な思想潮流を予言したのであり、またその源流をなすものであった。

先ずそれは「時代閉塞の現状」(1910年)として明治末年を総括した石川啄木に強烈な影響を

与え、そのロマンティズムは与謝野晶子の『みだれ髪』(1901年)に代表される『明星』(1900年創刊)の浪漫主義に理論的支持を与え、また田山花袋を通じて自然主義に影響した。樗牛の個人主義的観点からの人生問題への追求は、清沢満之、綱島梁川によってさらに人間の内面的世界への思弁的沈潜をもたらしたともいえる。「樗牛の影響も手伝って、34、5年頃から日露戦後の頃までの間は、人生問題が青年の関心事となり、所謂青年の煩悶と青年の自殺との問題が頻に教育者の頭を悩ますに至った。その内生活に於いて国家的公共的生活と離れんとし、その潔癖と感情とによって世俗的事功と好尚とを卑しманとした彼等青年にとっての人生問題は結局自己の問題に帰した。自己の真に求める所、自己の血と涙とによって得た所のものの外に、人生の価値はない。かくの如き主観的にして絶対的なる要求は、ハムレットの所謂『生きるか死ぬるか』を問題にせざるを得なかった。」⁶⁾

この青年の煩悶に答えようとしたのが清沢満之、綱島梁川であり、彼等は樗牛の個人主義を超えた宗教的な内面的信仰に立って、人生と人間の問題を思索したのである。1901(明治34)年、一高に入学した阿部次郎は、高校時代の彼の精神的成長に深く影響した思想家として清沢とゲーテをあげている。「私は高等学校時代に就いて、更に二つのことを想起して置かなければならぬ。一つは清沢満之先生の最後に近く、消耗性の紅顔をして携帯用の痰壺に始終痰を吐きながら話して下さった仏教講話を聴くと共に、また雑誌『精神主義』の論文を熱心に愛読したことである。私は内村先生やトルストイのような基督教のきびしさとはまた異なる静かに澄んだ世界を見た。そうしてその滋光に浴することを喜んだ。仏教徒の家に生れながら、仏教に対する本当の尊敬と関心とを持つようになったのはずっと後れて、それは全く清沢先生のお蔭であった。」⁷⁾それからもう一つ、一高時代の阿部は、『ファウスト』の読書会を通じて、ゲーテとの結縁を深めたのである。

30年代における青年の人生問題についての煩悶と、その帰結としての自殺を典型として示したのが、1903(明治36)年5月、「巖頭之感」を残して華嚴の滝に身を投じた一高生藤村操であった。彼の自殺は、当時の青年によって人生問題がどのように受けとめられていたかを象徴的に示すものとして、時代的意義があった。藤村の死をまねた自殺者が続出したということが、それを示している。藤村の親友安倍能成は、「事件は世間を聳動して、その夏などは、今の水道橋駅のある所から飯田橋駅までの、まだ何もなかった土手を、『悠々たる哉天壤、遼々たる哉今古』という『巖頭之感』の文句を高声に誦する青年書生の声を、夕暮などに聞いたものであった」⁸⁾と回想している。

明治36年といえば、日露関係が風雲急を告げ、戦争への危機感からするナショナリズムが高揚した時期であった。正にその時代に、「個人主義的思想に感激して、自己への忠実を第一とし、自己内心の声に聴かんとした」⁹⁾青年層が出現したのであった。そこに我々は、国家主義と個人主義によって織りなされる、時代の特異な思想動向を読みとることができる。

(五)

日露戦争は曲りなりに日本の勝利に終わった。しかし戦後に出現したのは、戦勝による高揚したナショナリズムというよりは、「勝利の悲哀」(徳富蘆花)ともいふべき自然主義文学の興隆であった。

人生における善と美、理想と幻影の虚偽をあばき出し、人間のありのままの姿を凝視して、それを虚飾なく表現しようとしたのが自然主義であったが、田山花袋、岩野泡鳴、島崎藤村、正宗白鳥等当時の自然主義を代表した作家の中でも、その主張と傾向には多少の差異がみられた。しかし彼らは、共通して、例えば徳富蘆花の「思出の記」1901（明治34）年に代表されるような理想主義に背を向け、向上や進歩において人間をみるのではなく、人間の醜悪、人生のはかなさをやむをえざる人間の自然主義的真実として認めようとした。こうした戦後の思想風潮、労働運動の高揚、社会主義、無政府主義の浸透に対する天皇制政府の焦燥、憤懣、危機感が牧野文相の訓令第一号（1906年）や戊申認書（1908年）に示されたのである。

この時代状況の本質を「時代閉塞の現状」（1910年）として鋭く洞察し、国家権力との妥協なき対決を通じて、大正社会主義への展望をさえ開こうとしたのが石川啄木である。他方、明治末年における『白樺』（1910年）、『青鞥』（1911年）の創刊は、明治の自然主義とは異質な大正文化への動きを表現するものであり、そこに示された人道主義、教養主義、文化主義が大正文化を性格づけることになるのである。

時代の思想潮流としての自然主義と大逆事件（1911年）に示された思想の自由に対する国家権力の弾圧が、啄木を「時代閉塞の現状」という現実認識に導いたのである。啄木にとって、自然主義は、青年がよるべき理想を喪失したことの直接的表現であった。それは、青年が「理想を失い、方向を失い、出口を失った状態」の所産であり、そこには「今日の我々青年が有っている内訌的、自滅的傾向」が底流として存在していた。

他方、強大な明治国家権力は、国家体制を批判し改革しようとする思想と運動に対して、大逆事件が示した如く、峻烈な弾圧を加えるのに最早何のためらいももたなくなった。青年は批判の矛を収めて、国家が許容する自由の範囲に逼塞することを強いられている。このように「我々青年を囲繞する空気は、今やもう少しも流動しなくなった。強権の勢力は普く国内に行互っている。」¹⁰⁾これが啄木の認識した時代閉塞の現状であった。

啄木はこの現実認識に立って、「オーソリティという共同の敵」に対して閉塞を破る思想闘争を開始し、明日への考察をわが物としようとしたのである。それは明日の必要のために「今日」を徹底的に批判することであった。「一切の空想を峻拒して、其処に残る唯一つの真実——『必要』！これ実に我々が未来に向って求むべき一切である。我々は今最も厳密に、大胆に、自由に『今日』を研究して、其処に我々自身にとっての『明日』の必要を発見しなければならぬ。必要は最も確実なる理想である。」¹¹⁾啄木にとって批判されるべき敵が何であり、明日の必要が何であるかは、彼自身直接には語っていない。しかし我々は啄木の意図した方向を、秋水の公判記録の克明な書きうつしとそれへの感想「A Letter From Prison」、詩集「呼子と口笛」（共に明治44年）、明治43年の短歌に読みとることができる。「今や我々青年は、此自滅から脱出する為に、遂に其『敵』の存在を意識しなければならぬ時期に到達しているのである。それは我々の希望や乃至他の理由によるのではない、実に必至である。我々は一斉に起って先づ此時代閉塞の現状に宣戦しなければならぬ。自然主義を捨て、盲目的反抗と元禄の回顧とを罷めて全精神を明日の考察——我々自身の時代に対する組織的考察に傾注しなければならぬのである。」¹²⁾これは明治40年代に対する最も適確な時代診断であった。

秋の風我等明治の青年の危機をかなしむ顔撫でて吹く

時代閉塞の現状を奈何にせむ秋に入りてことに斯く思ふかな
つね日頃好みて言ひし革命の語をつつしみて秋に入れりけり
明治43年の秋わが心ことに真面目になりて悲しも
地図の上朝鮮国にくろぐると墨をぬりつつ秋風を聴く

(六)

明治30年代の思想潮流の特質は、以上検討したように、国家主義と個人主義の相克にあった。それは資本主義の発展に伴う時代特質の思想的反映であった。他方、教育思想が思想である限り、それはこうした時代特質と時代の思想動向と無縁であることはできず、それらを自らの中に反映せざるをえなかった。思想は時代に制約されたイデオロギーとしての性格をもつからである。ここでは教育思想における国家主義と個人主義の相克を谷本富と樋口勘次郎の教育方法思想を通じて検討することにする。

藤原喜代蔵は『明治教育思想史』(明治42年)において明治後半期の教育思想の特徴を次のように図式化している。

明治25年～明治35年

{ 教育原理＝道徳的教育説
教授学説＝開発主義 ヘルバルト派教授説 活動主義

明治35年～明治42年

{ 教育原理＝社会的教育説
教授学説＝活動主義 実験的教授説 個別的教授説

この図式に従えば、30年代の教育思想における国家主義的傾向を社会的教育説において、個人主義的傾向を方法上の活動主義、個別的教授説において考えることができる。明治20年代のヘルバルト教育学の流行は、谷本富の『实用教育学及教授法』(明治27年)、『科学的教育学講義——ヘルバルト論弁』(明治29年)において頂点に達した。しかし30年代になると、ヘルバルト教育学の個人主義的傾向を、国家主義の立場から批判する国家主義教育学、或いは社会的教育学が出現してきた。それを代表したのが谷本富の『将来の教育学—国家的教育学卑見』(明治31年)、樋口勘次郎の『国家社会主義新教育学』(明治37年)、『国家社会主義教育学本論』(明治38年)、吉田熊次の『社会的教育学講義』(明治37年)等であった。20年代にヘルバルト主義を最も精力的に鼓吹した谷本自身が、ヘルバルトを批判するようになったのである。そしてこの方向においてベルゲマン (P. Bergemann), ナルトプ (P. Natorp), シュライエルマッハー (F. Schleiermacher) 等の社会的教育学が翻訳され、また次々と摂取されたのである。

他方、ヘルバルト五段階教授法の生気のない形骸化に対する反発は、時代の個人主義的傾向に対応する形で、一種の児童中心主義、自発活動主義を生み出した。樋口の『統合主義新教授法』(明治32年)、谷本の『新教育講義』(明治39年)、『系統的新教育学綱要』(明治40年)等が、その傾向を代表するものであった。そこではエレン・ケイ (Ellen Key) の『児童の世紀』、デューイ (J. Dewey) の『学校と社会』、ライ (W. Lay), モイマン (E. Meumann) の「実験的教育学」等が、活動主義を支持する理論として導入された。教授の形式的段階よりも、教授の個別化と児童自身の活動的学習が、教育方法上の観点から注目されるようになったのである。

この活動主義は谷本の「自学輔導」という言葉によって典型化されたのであるが、その活動主義的方法は、また同時に、谷本のいう「活人物」形成を意図するものであった。谷本は、明治30年代のナショナリズムが要求する人間を「活人物」と名づけた。それは帝国主義的侵略の先兵として海外に雄飛する人物であった。教育上の活動主義は、個人の研究心、自治、活動を教育実践の基本としながら、国家の要求する国家的人物を形成しようとしたのである。その教育方法は、生徒の発達の特性を一程度考慮しながら、帝国主義的膨張に積極的に加担する活人物を形成するものであった。この人間像において国家主義と個人主義は逆説的な形で結合したのである。目的における国家主義と方法における個人主義のこの奇妙な結合は、谷本の新教育十箇条に鮮かに表現されている。しかしそれはまた、教育思想における個人主義の不徹底さを暴露するものであった。何故なら、その個人主義は、啄木のように時代の国家主義の本質を批判する思想の深さを、自己のものとするのができなかったからである。ともあれ、新人物、活人物を造る原則としての、谷本のいう新教育の十綱領は明治後半期の教育方向を示すものとして興味深い。

第一条一子弟をして何事にまれ、偉大ならん志を立て漫に卑屈ならしむべからず

第二条一自ら勞して立身出世せん事を心掛け親譲りの身代などを当てにせしむべからず

第三条一官吏月給取りを唯一の目的とせず、寧ろ実業に従事して活動せしめざるべからず

第四条一家郷愛着の念を打破り、万里遠遊の志を奮起せしめざるべからず

第五条一都会の生活を好まず、村落僻地に在るを喜ぶの情あらしめざるべからず

第六条一高等の学校に入る者卒業証書を過重視せず、唯是れ立身の門出と心得終生自修發展を怠るべからず

第七条一万事理論のみを過重視せず、寧ろ実地の熟練を大切に思はしめざるべからず

第八条一早婚を戒め又楽隠居など卑屈の心あらしむべからず

第九条一酒色の欲を節し品行を慎み身心健全にして長寿ならしむる様心掛けしめざるべからず

第十条一信用を重んじ、虚偽を卑むる風を養成せざるべからず¹³⁾

(七)

谷本によれば、「其の人としての人の人たる分を尽くさず様にすることを教育の目的として説くのを個人的教育学¹⁴⁾」というのであるが、また同時に、その個人は国家を離れた個人ではない。「我々は固より一個人であれども然れども国家の内に於てのみ之れを見て、国家の外に於ては人を見ぬものとするのである。」¹⁵⁾このようにして国家を目的とする教育学が将来の教育学として措定されることになる。この「国家的教育学と云うものは一国家の維持と繁栄とを目的とせる教育を説くものである」¹⁶⁾と定義される。

この国家的教育学の目的として、第一に「個人は国家以外には存在せず」という所から、国家心、互順の徳の養成が主張され、第二に智・堪能・情・意の形成、第三に身体の育成が説かれてくる。これらが「教育の力を以て更に世界に雄飛する」「活用のある人」の内実を構成するのである。これが国家の要請する個人の形成であり、それは30年代の天皇制国家が要求した人間像に理論的根拠を与えるものであった。

活人物を形成しようとする谷本の国家的教育学は、現実の明治国家を内的に支持する国家主義に連なるものであった。それは彼の社会主義に対する態度において明らかであった。彼は「今日

国家の上に危険の虞のあるのは社会主義の流行である』¹⁷⁾といて、社会主義に対する防衛の姿勢を30年代初期に既に明確にしていた。30年代末になると、彼は自らの国家的教育学を社会教育学として捉えなおし、その内容を社会主義との対比においてより明らかにしようとした。「国家教育学と云ふものは取りも直さず一種の社会教育学なのです』¹⁸⁾と規定され、「一個人の心を教育するのではなくして、一個人を教育して其の固有の社会心を発揚せしめ以て社会の爲めになると云ふやうな人を造るのが即ち社会的教育の目的であります』¹⁹⁾とその内容が示された。それは何処までも国家秩序を内部から支持する人間の育成であった。

ただ、谷本も「今後の世の中に於きましては社会主義と云ふことは追々一つの勢力になって行く」と云ふ事は毫も疑いはございませぬ』²⁰⁾という現実認識をもちつつ、社会主義は現在の政治体制の偏倚した変革を企てる危険な主義として、それに対する拒否の立場を強く打ち出した。ただ注目すべきことは、谷本が、社会主義的変革に代る、社会政策を通じての社会改良に積極的関心を寄せていることである。社会主義思想と労働運動はむしろ労働者、農民の悲惨な生活現実を明らかにしたという功績をもつのであり、そこから社会改良の必要性が自覚されるべきであった。彼は、それを思想均霑主義と表現し、「文明の思想」を万民一同が享受すべきであると主張した。それが教育の世界に展開されると、義務教育の無償化、補習教育の義務化として具体化されるべきであるという主張になったのである。

(八)

樋口勘次郎の「国家社会主義教育学」という立場も、その内容は、谷本の国家的教育学とそれ程距りのあるものではない。樋口の場合も、谷本と同様、教育と人間の国家的制約と社会的性格の認識が、「国家社会主義教育学」といういささか仰々しい名前で表現されているにすぎないともいえる。

「余の社会主義は国家的社会主義なり。我国を以て他の社会に競争せむとせば、国内の社会主義を進歩せむべしといふなり。外国に対すれば国家主義となり。国内に見れば社会主義なり。個人に対して国家の経営を催進せむといふなり。』²¹⁾このように彼の国家社会主義は極めて安易に社会主義と国家主義に分離するのであり、しかも「国家社会主義は国家の利益を目的とし、国家の幸福を増進せんことを計るもの』²²⁾というように、その社会主義は国家主義的富強に奉仕すべきものであった。従って樋口の国家社会主義は、「世間に流布せる直訳的社会主義にあらざるを信ず』²³⁾「社会主義はただに貧人により、労働者により、圧抑せられたるものによりて主張せられ、行はるるものと思ふ勿れ』²⁴⁾のように、幸徳や堺の社会主義とは全然異質のものであり、むしろある事実の社会的国家的性格を指示するものというべきであった。

「余の社会主義は、かかる社会が、団結して事業をなし、感じ、行う主義をいふ。社会主義即共同主義、団結主義なり。即ち只個人主義の反対なり』²⁵⁾という程度のものであった。「社会主義は団体的生活なり。共同的事業なり』²⁶⁾というようなことが平然と主張される。公共事業の発達、鉄道の敷設、公立学校の整備、電灯、電話の附設等が総て社会主義の実行ということになる。「社会主義は大なる組織、大なる器械によりて、生産に従事するを許すを以て、最も経済的の組織なり』²⁷⁾と樋口は社会主義によって社会は繁栄し、個人主義によっては衰退に向うという。

以上のような国家社会主義における教育として、教育の国家的社会的性格があげられてくる。

「我国教育の今日あるも、主として社会主義の結果なり。個々の家庭にて教育する時代はとくに去りて私塾寺子屋の教育となり、寺子屋私塾はまた公立学校となり、私立学校は代用学校となり、補助学校となり、認可学校となり。義務年限を長くし、授業料を廃し、其の教科の書までも国定にせむとす。此れ国家社会主義にあらざりて何ぞや。」²⁹⁾社会主義は、教育において貧者には授業料を免じ、学具を供給することによって貧富両者に同等の条件を具体化しようとするのであり、樋口にとってはそれこそが国民教育の精神であった。「社会主義は只一切の国民に成るべく平等なる地位と便宜とを与へて公平に競争せしめむとするものなり。」²⁹⁾

この競争を通じての社会の進化によって社会主義は実現されるというのである。「社会主義は理学的なる確実の希望を与ふるものなり。此の世に於て次第によりよき社会を実現し得べしと教ふるものなり」³⁰⁾という立場から、樋口は「自利を謀ることなく」「大なる社会の長き命の幸福を目的」とすることを説く。社会のためになることは個人のためになることであり、それはまた子孫のためになることと考えられたからである。その「社会主義は革命を好まず、進化を貴ぶ。社会主義は、今日の大勢に逆わず。決して富豪の財産を奪はむといわず」³¹⁾というように、その社会主義は革命ではなくて進化を原理とするものであった。そして「社会主義は教育の普及、社会の団結によりて、次第に其の発達を謀らむとす。社会主義は進化の大法によりて動かむとするものなり」³²⁾という形で、社会主義が教育の普及に求められてくるのである。

樋口は個人主義教育に対応するものとして哲学的教育学を、国家社会主義教育に対応するものとして経験的教育学を措定する。彼は、教育の個人主義から国家社会主義への必然的移行につれて、哲学的教育学の無価値と経験的教育学の建設の必要と可能がいよいよ明らかになったという。哲学的教育学は人間の心理的解釈に満足する個人主義教育学であるが、教育が心理的理法によってのみでは究明しつくしえないことは余りにも明白である。彼にとって、教育は単なる個人的現象ではなくて、社会現象、社会事業であった。

彼はナトルプ、ベルゲマン等の「社会的教育学」から、「社会の外の存在は存在するものにあらず」「教育は社会に於てのみ為し得べきのみならず、又只社会の為にのみ考え得べきものなり」という見地を導出し、それを彼の立場の基礎に設定する。国家社会主義教育学は、「只教育を以て社会的事業となし、内は学校内の社会的組織より、外は市町村と称する社会的団体及国家に対する関係に論及し、殊に教育と、他の社会的現象即ち、経済、法律、制度、宗教、風俗、習慣、言語、文学等に対する原因結果の関係を研究せむとするなり」³³⁾とその性格が規定される。教育が社会現象である以上、それを研究する教育学は、思弁的観念的な哲学的教育学ではなく、経験的事実をザッハリッヒに研究する経験科学でなければならない。「社会現象を起すものは独立せる心理作用にあらずして社会ならざるべからざればなり」³⁴⁾という立場からすれば、社会現象としての教育を成立せしめるのもまた社会である。教育の社会的性格の究明は経験科学的方法によってのみ可能である。

社会現象としての教育に固有な教育の基本形式は、個人のために個人を形成するということではなくて、社会のために社会の成員を形成するということにある。「教育は社会の爲めに、其の社会に適する会員を養成することなり。(中略)学校も亦其の社会の需要する知識を与へ、其社会の道徳を実行するものを作るを目的とす。故に教育は時勢の要求によりて、教授の材料と主義とを定め、もし其の社会の学制及び教則の命ずる所が、元の要求に一致せざるを發見せば、先づ

之を改めざるべからず」³⁵⁾と教育の本来の性格が規定された。

教育の基本的課題は社会が要求する人間を形成することであった。明治30年代という日本資本主義が帝国主義段階に移行していく時代の社会が要求した人間を、谷本は「活人物」と表現し、それを実現する教育を「活教育」に求めた。

(九)

活人物の人格的特性は、谷本の新教育十箇条において明らかである。そこでは個人の個性的発達が、同時に、社会・国家の発展につながる事が理想とされたのである。「卑屈怯懦を戒め又勇往邁進自家の長所を發展して以て国運の隆盛を計るべしと云ふのが私の理想です。此の自己發展主義がやがて、新人物、活人物となるので、又国家の為めを計るは即ち自分の為めになり、自分の為め即ち国家の為めとなる所で大我小我が一所になる、夫れが所謂攝取である新教育、活教育と云ふも何にも外にない、皆此の自己發展主義に基いて違ったらドウかと云ふに他ならぬのです。」³⁶⁾「私は自家發展を説き個人教育を説くと雖もそれがやがて、有為の人物を作出して日本帝国をして愈々隆盛ならしめんとするので、国家に関係ない教育学は説きませぬ。」³⁷⁾これが谷本における国家と個人の基本的な関係であった。それは国家主義の発展に奉仕する個人主義的人間の成長を意図するものであり、いわば明治30年代における国家主義と個人主義の結合の教育的表現であった。国家的発展は個人的人間の成長、発達によって求められようとしたのである。国家主義的人物については、「世界的生存競争に適合す可き人民」(浮田和民)という「帝国主義時代の人間像」が説かれ、その人間を育成する個人主義的教育については、「自学輔導」が方法論の原則として打ち出されてくるのである。

自学輔導を通じて活人物を形成するのが、活教育——活動主義的教育であった。それは「何処までも自然の原則に従い自然の順序に従って生活をして奮発せしめ勉強せしむると云ふこと」³⁸⁾を原則とするものであった。谷本によって、自然に背く教育として、(1)児童を苛酷に取扱う教育、(2)子どもを早くから方正の君子として扱う教育、(3)子どもの生理的・心理的要求を抑圧する教育、(4)注入教育を実行すること等があげられていた。「国家主義にも個人主義にも偏せず、何事も過不及なく、天理に順ひ自然に則って寛嚴宣しきを得、以て児童の心身を発達せしめ個人として国民として立派ならしむるのが私の云ふ新教育の大主意である。」³⁹⁾ここに谷本の基本的立場があった。これは樋口が、(1)つめこみ主義よりも児童の研究心を、(2)圧制的訓練よりも生徒の自治を、(3)受動よりも活動を、教授の基本的原則とした見地に対応するものである。その教育の立場は、個人の能力を拡張充実させ、実力を養成するという意味で、個人を発達させようとするのであるが、その個人は同時に国家的人物であるので、自らの発達を通じて国家発展に奉仕する活人物たらざるをえないのである。これは国家主義的個人を形成する巧妙な個人主義的方法といえる。それは子どもの発達の特性をある形で考慮しつつ、帝国主義的膨張に積極的に参加する活人物を効率よく育成するのに最適の教育方法であった。

(十)

帝国主義時代の教育の課題は、個人的・社会的・国家的にも、世界的生存競争に適合した人民を養成することにあると看破したのは浮田和民であった。「国家の一要素たる個人も、亦た極めて生

存の義務を重んじ、且つ飽くまで生存の為に、競争するの勇気を養わざる可からず。今後の日本が最も要する所の武勇は討死の武勇に非ずして生存の勇氣なり。困難に処して能く耐忍し、逆境に在りて能く生存するの武勇なり。』⁴⁰⁾このように生存の義務が国民教育の倫理道德の根本である場合、国民教育の第一の重要性は体育と衛生に置かれることになる。

「健全なる生命は健全なる身体に寓し、生存の興味、生存の勇氣、一に其の源泉を身体の健康に発するものなればなり。』⁴¹⁾このことは、戦争の勝敗が兵士の体力によって、また産業上の競争が生産者の肉体的忍耐力によって、しばしば決せられることからしても明らかであると浮田は主張する。ところが「現今の日本人が、現今の欧米人に比して体力虚弱になることは、争ふ可からざる事実なりと言ふ可し。吾人は唯だ現今の欧米人に比較して然か言ふのみならず、現今の支那人に対しても、劣るものあることを自認せざる能はず』⁴²⁾という形で、彼は一種の愛国的熱情をもって体育を通じての日本人の体位向上を訴えかけた。

人間の本性は活動にあり、「凡そ健全にして強盛なる生命は、活動を原因とし、又た活動を結果とせざるものなし。活動を離れては知識も其益なく、思想も其の目的を失い、真理も其の価値を失ふ』⁴³⁾ものであるので、活動を通じて健康を実現する体育が重要な意味をもつことになる。健全なる身体における健全な精神である。ここから彼は、「人生の不幸身体の虚弱なるより甚しきはなく、其の幸福は身体の健全なるより大なるはなし。健康は人間成功の資本なり。身体強壯なれば如何なる困難にも打勝つことを得べく、事業破壊しても七顛八起やがて廻天倒日の功を奏せむこと難きに非ず』⁴⁴⁾という形で、体育の必要性を主張する。体育を通じて鍛えあげられた健康な身体は、健全な精神と人間個人の生存の必須条件であり、またこうした国民によって構成される国家の生存の不可欠の要素でもあった。

国民に生産労働の基礎的条件として、強壯な肉体と健康な身体の形成を学校体育に求めた浮田は、他方、国民教育のもう一つの不可欠の要件として実業教育の必要性を主張していた。「国民教育は経済的実学を主要と為さざる可からず。是れ経済学のみを学ぶ可しと云ふ意に非ず、唯だ経済的教育、即ち実用的教育ならざる可からずと云ふに在り。』⁴⁵⁾教育は自然と社会についての実学的知識を国民にしっかりと教えなければならないというのである。

こうした実学、実業教育への姿勢は、帝国主義時代の人間像として活人物を主張した谷本富にも共通している。彼は活人物を育成する新教育において「経済思想」と「手工」の重要性を説いた。彼は学校での実業教育として、(1)人間企業の発達及び現状、(2)経済的生活の要素の一般、(3)実業道德問題の教授を要求した。(1)に関しては、火の必要、労力の必要、企業の段階、将来の機械工業、農業上の学理の応用、造林と牧畜、水産業の改良、遠洋漁業、航海と海外移住の奨励が、(2)に関しては、労働の尊重、資本の合同利用、消費組合、銀行事業、保険事業が、(3)に関しては正直、勤勉、規律、信用、節儉、貯蓄、企業心、進取、競争等が教授すべき内容としてあげられていた。

谷本は、これらの問題を知識として直接に子どもに教えるのではなく、彼らの遊戯の中に実業教育に迫る教材と方途を見出すことが可能であるといっている。それは活動的な遊戯を通じての実業教育である。「小学校の生徒が遊戯をして遊び戯むる其の遊戯が暗に人間企業の段階に能く似て居る、即ち小学校生徒が日常遊戯をして居る其の有様が、吾々祖先の遣った企業の段階を反復して居るのじゃと云ふ事に気が付くと（中略）此の遊戯と云ふ事を利用して、経済思想、企

業思想を注ぎ込んで貰ひたい、(中略) 児童日常の遊戯が経済思想を教へる根本に為ると云ふのです。⁴⁶⁾ このような「遊戯を利用して企業を教える」実践例として、谷本は自ら参観したデューイのシカゴ実験学校をあげている。こうした点を通じて、経済社会機構の理解、生産技術の習得、資本主義社会における労働大衆の実業道德の教化を意図した、谷本の実業教育への姿勢が何処にあったかを読みとることができる。

彼は、小学校において実業教育に直接につながるものとして、手工科を必須の教科としようとする。従来の教育は余りにも言語的分析的解剖的であったが、今後の教育は活動教育として実物、構成、総合を重要視するのでなければならない。「将来の学校は天地自然を教育の対境とせんことを希望します。人を主とし天地を客とし従って理科を重んじ別して園芸、手工等を重んぜられんことを希望します。」⁴⁷⁾。というように、彼にとって手工科の尊重が新教育の特質であった。この手工科における基礎的技術教育は経済思想の教育とあいまって、実業教育・職業教育としての意味をもつものである。谷本は、人間が職業をもつということは単に生活上の必要ということではなく、人間にとっての永遠の道德的責任の遂行という意味があるという。従って今後どのような人間も職業につくべきであり、手工はその基礎的条件を形成するものであった。

彼はワードワードによりながら次のように主張する。「従来の教育は心を勞する事に偏して居る、チツとも手を勞する事をしない、従来の教育では人が免角職業を忽せにする事になる、又糊口の道を得る事に全然不適當である事に為る、貧賤なるものの児童は、学校に長く就学しようと思つても、職業を覚える事が出来ぬから、学校を半途退学する様に為る、学校を半途で退学するのは、学校が文芸的であつて手工を教へぬからである、然らば今後の学校に於ては成るべく實際的生活に必要な教育をして行つて、心を勞すると同時に手をも勞せしめ、而して手工と云ふものを子供に教へる、殊に貧賤なる子供には學問をさすと同時に仕事の素養を与へたならば非常に宜いではあるまいか、斯う云ふ理屈であるから手工を学校に置いて貰ひたいものである。」⁴⁸⁾ しかも谷本は、手工は単に実用的職業的意味のみでなく、もっと深い教育的意味をもつという。即ち、「手工と云ふものをチャンと秩序立てて教授したなら、従つて高尚なる心力を養ふ事が出来、別して手工に依て人の品性を純潔ならしめ人の氣品を高尚ならしむる事が出来るのであります。

(中略) 今日の如き注入的の教育即ち記憶にのみ訴へる教育は、児童をして興味を保たしむる事が少ないが、手工に於て物を作り拵えると云ふ事をするのは、教授上の興味を持たず点から言ふても、太だ調法である、デありますから、一方では職業上の必要と、實際上の必要があり、又一方では教育上の必要と教授上の必要があるから、是非共学校に手工を置く様にして貰ひたい。」⁴⁹⁾

谷本は手工の教育上からの必要に関して、手工と(1)健康一体育、(2)知育一五官及び記憶の訓練、(3)情育一感情の教育、(4)意育一意志力、注意力の教育、(5)道德教育一道德心の養成、正道をふまなければ何事も成就できないことを手工を通じて感得することが、道德教育的意味をもつ、(6)国民教育、(7)人道教育、(8)宗教教育との関連を説き、その教育的に不可欠な意味を考察している。

(七)

谷本は明治30年代における自らの教育思想の発展を二つの時期に分けている。一つは『将来の教育学』(明治31年)が代表する時期で、それは「一国の隆盛繁栄を旨とする教育学説の時代」であった。ここでは、時代のナショナリズムの動向に反応する形で、教育の社会的国家的性格が、

20年代のヘルバルト主義への批判をこめて強力に主張された。もう一つは、明治36年に終る海外留学の後、『新教育講義』（明治39年）、『系統的新教育学綱要』（明治40年）、『新教育者の修養』（明治41年）、『新教育の主張と生命』（明治42年）が書かれた30年代末から40年代初期であり、それは「新教育即ち新個人主義の時代」である。日露戦争に伴うナショナリズムと重なり合うこの時期の個人主義への傾向は、青年に煩悶と懐疑を通じて新しい人生観の探求に向わせた。それは「青年が個人主義的思想に感激して、自己への忠実を第一とし、自己内心の声に聴かんとした時代」（安倍能成）であった。谷本の教育上の個人主義は、そうした時代の思想的動向とも関連して、教育思想としては児童の活動、個性、自己発展、自学自修等に力点をおくものに変化した。この時期の彼の活動主義、児童中心主義は大正自由教育運動の思想的源流をなすものであった。

明治30年代前半における海外留学の後、谷本は自らの教育思想の変化を自覚した。『将来の教育学』における国家的教育学では、社会から個人へ、即ち社会即個人という立場がとられていたが、30年代後半の個人主義の時代には、個人から社会へ、即ち個人即社会という立場に立つようになり、社会・国家と個人の関係についての見方が逆転している。谷本は、徒らに国家社会を論ずるだけでは国運を發揚することにはならないのであり、むしろそのためにこそ個人的教育学を主張しなければならないというようになる。「私はどこまでも、国運を隆盛にするには個人が發達しなければならぬと云ふ。個人の發達を説くのが即ち新教育である。」⁵⁰⁾ 総ての児童の「自家活動性」（自己活動性）を前提とし、彼らを善良に發達させることによって始めて社会国家も發展するのである。「個人が完全に發達しなくては其の社会国家は發達しないのであります。即ち人民全体が立派になれば期せずして其社会国家は發達します。」⁵¹⁾

谷本は、国家よりもむしろ児童の自家發展の方がより重要であるとして、児童を教育の中心に位置づける一種の児童中心主義に立つようになる。「学校よりも、教師よりも、書物よりも、何よりも、子供其者が一番大事なのであります。児童を教育するのでありますから、児童と云ふ者を皆無にしたら教育は無い、教育は木石に向ってするのでありませぬ、家畜に向ってするのでありませぬ、教育の土台は児童であります、自家發展せしむる者は児童であります。」⁵²⁾ ここから谷本は、「教育は児童の為にして教師の為にせず」「教育は児童を知ることをして先務とす」という新教育の基本原則を導出する。教育は児童の個性の認識から始まるのである。彼は児童の個性の特質として「自家發展性」（自己活動性、自己發展性）をあげてくる。教育は児童の自己發展性の促進として行なわれなければならぬ。自家發展が児童の本性であるが故に、彼を適当な方法と状況の下におくならば、彼は自ら学び、自ら教える存在となる。教授は児童を自学せしめることであり、教育の極意は児童をして自ら学ばしめることである。「教授は自ら学ぶのである。訓練は自から修めるのである。自修自学の二つで、個人の長所を伸ばし短所を補うことが、新教育の目的であるのでございます。」⁵³⁾ これが所謂自学補導の立場である。谷本の言葉を使用すれば、旧教育は「押付け流儀」であり、新教育は「引伸し流儀」であるということになる。

以上のような児童中心主義の立場から、谷本はデューイ、ドモラン、ヘルマン・リーツ、セシル・レディ等によって展開された19世紀末から20世紀初頭の世界の教育運動に関心をよせ、それらの実践から生れた各々の「理想的学校」を「人間中心の学校」といつている。新しい学校教育の原理を、彼はサーチの「理想の学校」(Search: An Ideal School. 1901) から次の十箇条として導き出している。それらは殆んど大正自由教育の底流に存在する原理でもあった。

京都大学教育学部紀要 XXVI

- 第一条 学校は根本的生徒のために立てられんことを要す
第二条 学校は一層平等に一切の児童に均等の機会を与へんことを要す
第三条 学校は自然と合体せんことを要す
第四条 学校は能動的方法に依りて其事業を遂行せんことを要す
第五条 学校は遺伝、境遇、生徒の能力及び傾向を承認し自働、創作、選択並びに自活のために機会を与へんことを要す
第六条 学校は劃一の要求を離れ差別の教育の最大必要を承認せんことを要す
第七条 学校にては一切虚偽の勸奨を排斥し純粹の課業を好愛すること並びに其正道たるが故に是れを断行して完遂するを主とせしめんことを択取することを要す
第八条 学校は身体、智力並びに道德共に通じて健全ならんことを催進するを要す
第九条 学校は既に其成立を得たる上は又其結果に就て責任を負はんことを要す
第十条 学校の産物は自由且つ奮励の精神にして、観察を怠らず、勤勞、創作的研究乃至美術的享樂等の良習慣を有し、活世界に立って創造者たるべく、自治思想の独立を有し且つ富資に貢献する公民たらんことを要す⁵⁴⁾

注

- 1) 安倍能成：我が生ひ立ち，267～268ページ 1966，岩波書店
- 2) 前掲書 268ページ
- 3) 高山樗牛：国粋保存主義と日本主義，明治31年，樗牛全集第四卷，398ページ 1905，博文館
- 4) 高山樗牛：国民精神の統一——帝国憲法，教育勅語，及び日本主義，明治31年，前掲書，336～337ページ
- 5) 安倍能成：時代と文化，175～196ページ，1941，岩波書店
- 6) 前掲書 177～178ページ
- 7) 阿部次郎：生ひたちの記，71ページ，1952，角川文庫
- 8) 安倍能成：我が生ひ立ち 340ページ
- 9) 前掲書 359ページ
- 10) 石川啄木：時代閉塞の現状，古谷綱武編：石川啄木集(上)，250ページ，1950，新潮文庫
- 11) 前掲書，254～255ページ
- 12) 前掲書 251～252ページ
- 13) 谷本富：新教育講義，103～104ページ，1973，玉川大学出版部復刻版
- 14) 谷本富：将来の教育学——国家的教育学卑見，22ページ，1898，六盟館
- 15) 前掲書，22ページ
- 16) 前掲書，21ページ
- 17) 前掲書，308ページ
- 18) 谷本富：新教育講義，319ページ
- 19) 前掲書，318—319ページ
- 20) 前掲書，330ページ
- 21) 樋口勘次郎：国家社会主義新教育学，363ページ，1904，同文館
- 22) 樋口勘次郎：国家社会主義教育学本論，288ページ，1905，同文館
- 23) 樋口勘次郎：国家社会主義新教育学，341ページ
- 24) 前掲書，358ページ
- 25) 前掲書，343ページ
- 26) 前掲書，361ページ
- 27) 前掲書，348ページ

稲葉：谷本富と樋口勘次郎の教育方法思想

- 28) 前掲書, 349～350ページ
- 29) 前掲書, 354ページ
- 30) 前掲書, 366ページ
- 31) 前掲書, 357ページ
- 32) 前掲書, 356ページ
- 33) 前掲書, 69ページ
- 34) 前掲書, 298ページ
- 35) 前掲書, 133ページ
- 36) 谷本富：新教育講義, 115ページ
- 37) 谷本富：系統的新教育学綱要, 53ページ, 1907, 六盟館
- 38) 谷本富：新教育講義, 339ページ
- 39) 前掲書, 94ページ
- 40) 浮田和民：国民教育論, 明治宗教文学集(二) (明治文学全集88), 372ページ, 1975, 筑摩書房
- 41) 前掲書, 373ページ
- 42) 前掲書, 375ページ
- 43) 前掲書, 379ページ
- 44) 浮田和民：現時の青年に告ぐ, 明治宗教文学集(二), 389ページ
- 45) 浮田和民：帝国主義の教育, 明治宗教文学集(二), 363ページ
- 46) 谷本富：新教育講義, 216ページ
- 47) 谷本富：系統的新教育学綱要, 255ページ
- 48) 谷本富, 新教育講義, 228～229ページ
- 49) 前掲書, 229ページ
- 50) 谷本富, 系統的新教育学綱要, (附録, 所謂新教育とは何ぞや) 50ページ
- 51) 前掲書, 52ページ
- 52) 前掲書, 155ページ
- 53) 前掲書, (附録) 25ページ
- 54) 谷本富：新教育講義, 403ページ

〔本学部教授〕